社告

福翁自傳

福澤先生は天保五年大阪に誕生、三歳のとき豊前中津に歸り十四五歳にして始めて漢籍を學び二十一歳長崎に行て洋學の門に入り次て大阪に行き又次で江戸に來り弱冠の時より老餘の今日に至るまで終始西洋文明の一主義を以て生涯を成したる人なり其人の生涯は實に我國多事變化の日にして封建門閥の至靜より文明快活の新社會に移り先生亦その新社會の組織に與りて力あるは世人の認むる所なり先生本年六十五歳既往を回顧すれば苦樂一ならず實に一身の苦樂のみならず其行路の實際を聞けば由て以て時勢の眞面目を窺ひ見るに足る可し先生は之を子孫に告げ又知人朋友に語るを以て老餘の樂事と爲し去年來時に閑あれば之を口述して速記せしめ又自から筆を執りて記憶中に往來するものを書綴り漸く集めて一冊の書を成し福翁自傳と題して將さに出版せんとしたれども齊中の記事隨て成れば又隨て記憶に洩れたるものを思出して殆んど際限なき次第なれば冊子印刷は他日の事とし先づ之を時事新報紙上に掲載す可しとて取敢へず原稿の成りしものを取纏めて七月初旬より紙面の許す限り寫して以て讀者の清覽に供す可し

明治三十一年六月十二日

時事新報記者誌

社說

革新の時機迫る

議會に於て輿を占めたる黨派進んで政權を握り立法行政の兩機關相調和して始めて國政の進歩を期す可きものなるに然るに我國に於ては不幸にも双方互に立脚點を異にして恰も水火相接するが如く政府が解職せんば則ち議會が解散され解散相繼いで此に九年の歲月を閲し間に殘りなく之を通觀されば議會に於て一回は黨派間に特に對して一歩も進ひみど能はざりしのみならず帝國議會以來始めての議會なれども其中にも手ひ折合はんとするものわ

んに政府は又もや強ひて超然主義を行はんとしたるより政黨の方にても到底調和の見込なきを悟り議會開設の當初に立歸りて急進突擊の氣炎を生ずるに至りしは千嘆萬嘆の事なり遂に去年の初に於て